

遠軽町 横断歩道橋長寿命化計画

令和 5 年 1 月
(令和 8 年 2 月改訂)

遠軽町
経済部建設課

1. 長寿命化修繕計画の目的

(1) 背景

遠軽町が管理している横断歩道橋は現在1箇所あり、昭和48年に建設されている。

供用開始後49年が経過し、老朽化が進んでおり、限られた予算の中で今後、効率的・効果的な維持管理を継続していくためには、コスト削減の取り組みが必要不可欠である。

(2) 目的

架替や大規模修繕などの事後保全的な維持管理から計画的かつ予防的な維持管理に転換へと政策転換を図る。これにより、横断歩道橋の修繕等に関するコストの削減を図り、歩行空間の安全性・信頼性を確保することを目的とする。

2. 長寿命化修繕計画の対象横断歩道橋

長寿命化修繕計画の対象横断歩道橋は、遠軽町が管理する1箇所とする。

	1級町道	2級町道	その他の町道	合計
全管理横断歩道橋	1	0	0	1
うち計画策定対象横断歩道橋	1	0	0	1
うちR4年度計画策定横断歩道橋	1	0	0	1

対象横断歩道橋の諸元は以下のとおりである。

構造物名	神社通横断歩道橋
交差物件	石北本線
路線名	神社通
所在地	遠軽町西町1丁目、岩見通南3丁目
供用年	1973年
橋長	37.0m
総幅員	1.5m
活荷重	群集荷重
形式	〔上部工〕鋼床版飯桁〔下部工〕鋼製支柱（鋼管）〔基礎形式〕直接基礎（推定）

3. 健全度の把握及び日常的な維持管理に関する基本的方針

(1) 健全度把握の基本的方針

健全度の把握については、横断歩道橋の耐用年数や立地条件等を十分考慮して日常点検を実施するとともに、『横断歩道橋定期点検要領（平成31年2月 国土交通省）』に基づいて5年毎に定期点検を実施し、横断歩道橋の損傷を早期に把握する。

定期点検では、下記の表をもとに部材単位の健全性の診断と横断歩道橋の健全性の診断を行う。

区分		状態
I	健全	構造物の機能に支障が生じていない状態。
II	予防保全段階	構造物の機能に支障が生じていないが、予防保全の観点から措置を講ずることが望ましい状態。
III	早期措置段階	構造物の機能に支障が生じる可能性があり、早期に措置を講ずべき状態。
IV	緊急措置段階	構造物の機能に支障が生じている、又は生じる可能性が著しく高く、緊急に措置を講ずべき状態。

(2) 日常的な維持管理の基本的方針

損傷に対する地道な対応が横断歩道橋の長寿命化に大きな影響を及ぼすことから、比較的容易に対応が可能なものは日常の維持作業で措置するものとする。

4. 対象横断歩道橋の長寿命化及び修繕に係る費用の縮減に関する基本的方針

(1) 長寿命化及び費用の縮減に関する基本的方針

健全度の把握および日常的な維持管理に関する基本的な方針とともに、予防的な修繕実施を徹底することにより、常に高い安全性を確保しつつ横断歩道橋の長寿命化を図りながら、修繕に係わる事業費の大規模化および高コスト化を回避し、ライフサイクルコストの縮減を図る。

(2) 新技術等の活用

管理する横断歩道橋1箇所について、新技術や新工法の活用を検討し、令和13年度までに点検・修繕費用において約100万円のコスト縮減を目指す。

(3) 集約化・撤去

修繕費用や点検に係る維持管理費用を縮減するため、利用状況や地域住民の意見を踏まえたうえで、集約化・撤去を検討する。

令和13年度までに撤去することとなった場合、点検費用等の維持管理費として約400万円の費用の縮減を図る。

5. 対象横断歩道橋の次回点検時期及び修繕内容・時期

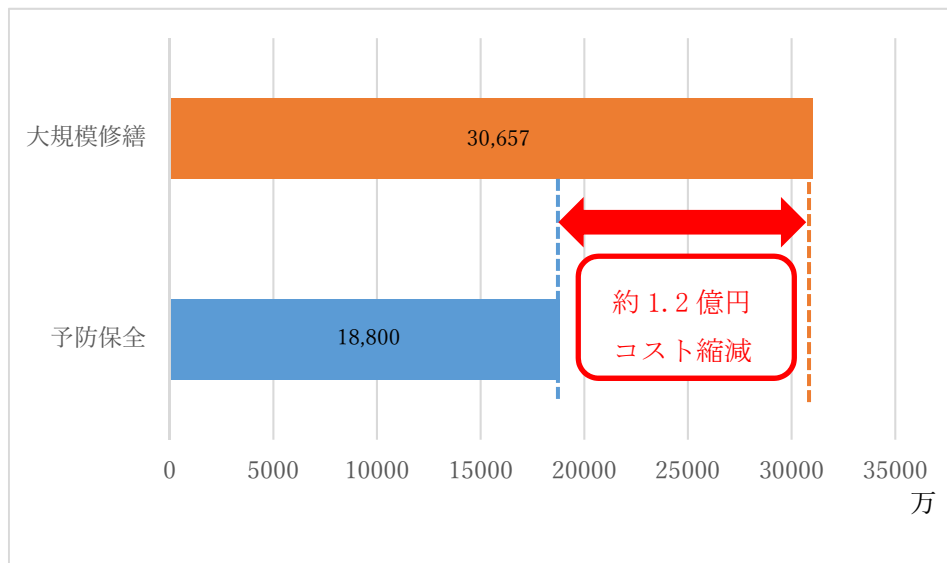
計画期間は2022年度（令和4年度）から2031年度（令和13年度）までの10年間とする。

名称	交差物件	点検年度	点検判定	点検・修繕計画										全体事業
				R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	
神社通横断歩道橋	石北本線	2020	Ⅲ				点検				塗装 塗替	点検		点検・補修
修繕・事業費（百万）							4				180	4		188

6. 長寿命化修繕計画による効果

損傷が深刻化してから大規模な修繕を実施する対症療法型の維持管理から、定期的な点検を実施して損傷状況を把握・予測したうえで適切な時期に早期予防保全的な修繕を実施することで、横断歩道橋の長寿命化が図られコスト縮減に繋がる。

横断歩道橋点検により現状を把握しながら適切な修繕工事を実施することで、横断歩道橋の安全性が確保され、歩行者及びJR軌道への第三者被害の防止が図られる。



神社通横断歩道橋について、大規模な修繕を行った場合と予防保全的な補修を行った場合の費用について比較を行った。

現在、腐食が見られる鋼部材について、予防保全的な補修として塗替えを行った場合と、使用を続け限界まで損傷が進行したときに大規模修繕として部材の取替えを行った場合で比較を行った。

大規模修繕の場合、約 3 億 1, 0 0 0 万円が見込まれるのに対して、予防保全の場合は約 1 億 9, 0 0 0 万円となり、コスト縮減として約 1 億 2, 0 0 0 万円（3 9 %）が見込まれる。